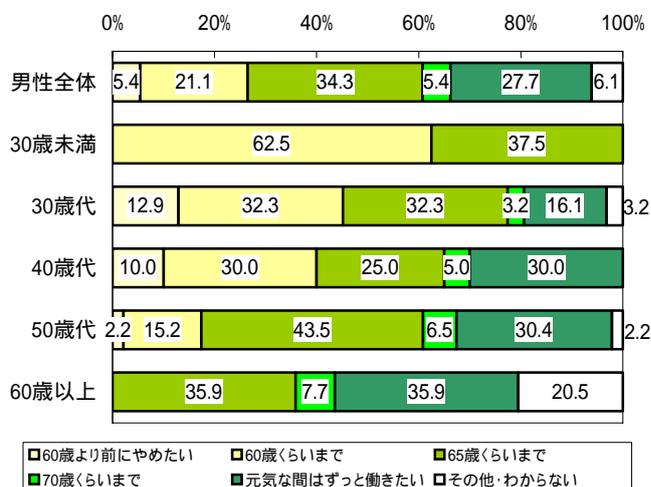


1. 高齢期の働き方に対する現役世代の意識

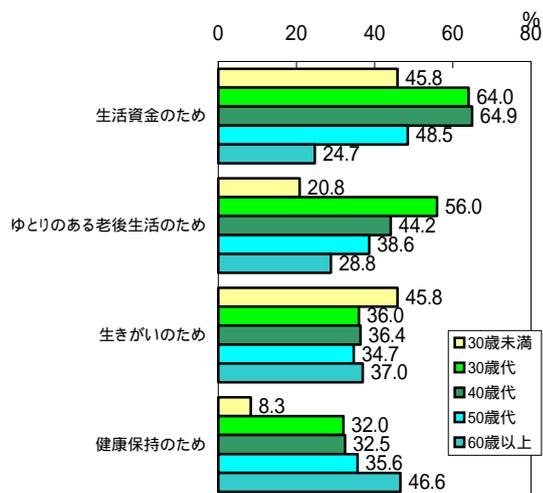
何歳まで仕事をしたいか、という問いに対して、男性では「65歳くらいまで」「70歳くらいまで」「元気な間はずっと働きたい」を合わせると7割に近く、高齢になっても働くことに前向きな人が多い。長く働きたい理由には、世代によって差がみられ、30～40歳代のミドル層の多くが「生活資金のため」と回答しているのに対し、60歳代のプレ・リタイア層では、「健康保持のため」や「生きがいのため」といった回答の割合がミドル層より高い。

高齢期にも現役時代と同様にフルで働きたい、という回答は男性で約3割、女性では約2割にとどまり、半数以上は勤務日数や1日の労働時間を現役時代より少なくしたいと考えている。そして収入に関しては、男性の約6割、女性の約5割が現役時代より少なくてもよいと回答している。収入が減ったとしても、負担を下げても無理のない働き方を望む人が多く、高齢者の働き方の多様性をうまく労働市場に取り込んでいく体制作りが求められる。

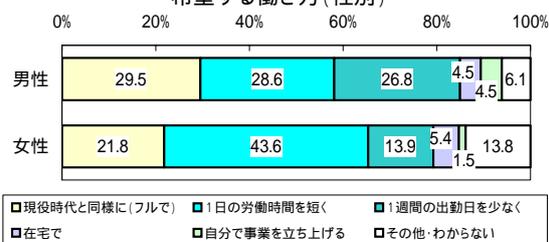
何歳まで仕事をしたいか(男性・年代別)



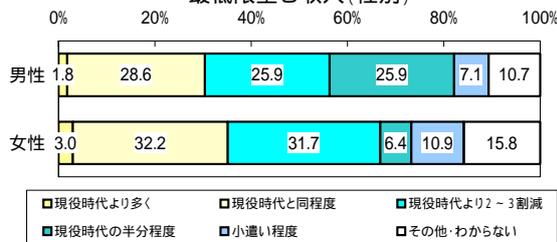
65歳を超えても働きたい理由(年代別・上位)



希望する働き方(性別)



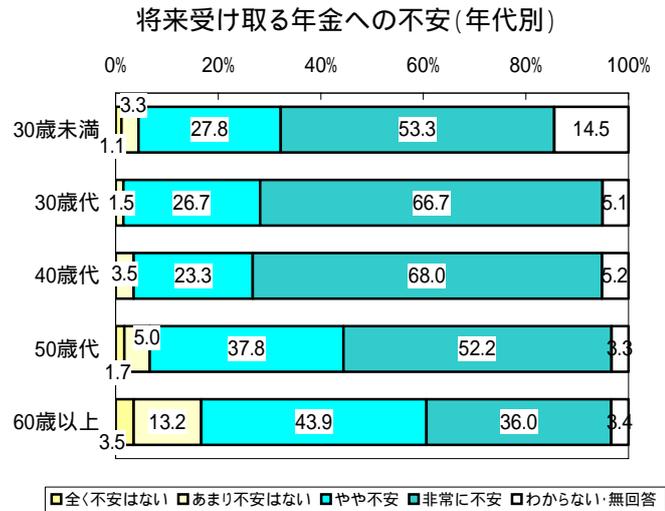
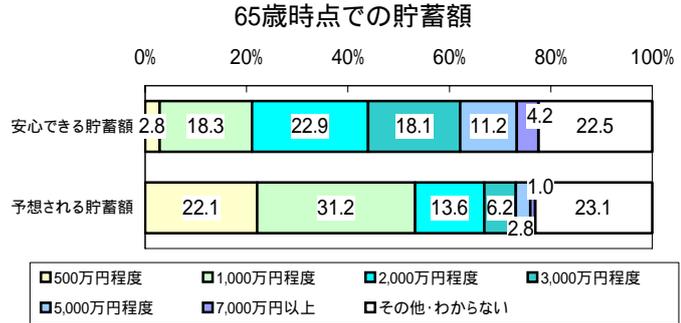
最低限望む収入(性別)



2. 高齢期の家計に対する意識

将来、65歳時点でどのくらい蓄えがあれば安心できるかという問いには、1人当たり「2,000万円程度」という回答が最も多かった。一方、実際にはどのくらい蓄えができていそうかという問いに対しては、「1,000万円程度」という回答が最も多かった。半数以上は、実際に蓄えられそうな額が、安心できる額よりも低いと予想している。

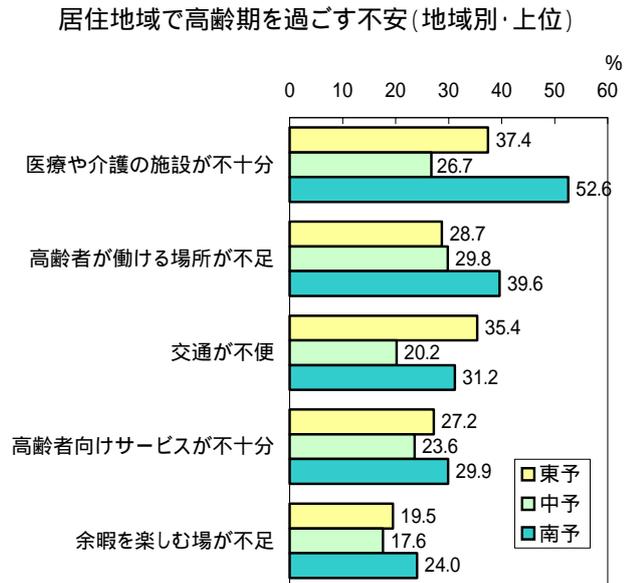
また、将来自分が受け取るであろう公的年金に対して不安を感じている人は8割を超え、特にミドル層の不安感が強い。高齢期の就労に対する意欲の高さの背景には、貯蓄額や年金への不安も影響しているものと思われる。



3. 高齢期の生活環境に対するイメージ

高齢期(「健康な間」と限定)を過ごしたい場所としては、大多数が「今住んでいる場所」と回答しており、移住や二地域居住のニーズはあまり高くないと思われる。

今住んでいる地域で高齢期を過ごすとしたら不満なことや不安なことがあるか尋ねたところ、男性では「高齢者が働ける場所が不足」「高齢者向けサービスが不十分」が最も多かった。女性は「医療や介護の施設が不十分」が最も多かった。地域別では



南予で医療・介護施設をはじめとする多くの点で他の地域より不安に思っている人の割合が高い。

4.まとめ

今後、長期的にみると労働力不足が懸念される中、女性の就業率とともに高齢者の就業率を上げる必要性が増してくるものと思われる。高齢者の特徴に適した職場環境を整備することは、多様な働き方をサポートすることであり、それは年齢や性別を問わず、多くの雇用者にメリットがある。また高齢者の経験や技術を活かすことは、企業にとってもプラスに働くことだろう。

過度な負担がない形で就労を続けることは、高齢者にとって健康で活動的な時期を長く保つことにも役立ちそうだ。

アンケートでは、比較的、収入にはこだわらない人が多かったが、しっかり稼いでしっかり消費してもらうことが、地域の活力維持のためにはより効果的と言えよう。

(上甲いづみ)